

ドイツの大学教授の Lebensweg

宇 京 早 苗

ドイツに大学教授が誕生したのは、1348年にドイツ最初の大学が Prag に設立された時と一般に考えられている（もちろん、この時すでに、これより150年近くも前に設立されたイタリアやフランスの大学では、ドイツ人の学生が学んでいたし、ドイツ人の教授がラテン語で講義をしていたが）。それ以来今日まで、ドイツの大学教授は大学そのものの変化と共に、実に起伏に富んだ道を歩んで来た。ちなみに、その Lebensweg は極めて大雑把に I. 大学教授誕生の段階 (14c-15c)、II. 成長の段階 (16c-18c)、III. 充実の段階 (19c-20c 初め)、IV. 自己変革の段階 (20c 中頃-現代) と区分することができるという。ここでは、紙面の都合もあるため、I. と II. における大学教授の姿を辿ってみたい。

すでに知られていることであるが、ドイツの大学は、イタリアやフランスに見られるように(大)都市文化を主なる基盤として設立されたのでも、またイギリスにおけるように教会を基礎として誕生したのでもない。ドイツの大学を管理し、この財政を担当していたのは国、つまり君侯たちであった。Prag に大学ができたのも、当時そこが Luxemburg 家の本拠地であったからである。従って、ドイツの大学教授は最初からほとんど例外なく Herrendiener, Staatsdiener であり、これによって当然のことながら、その存在形態も役割も〈自分〉から決めるのではなく、〈他〉から規定されることになったという根本的特徴をもっている。

Prag に大学が設立された時、Karl IV. は外国で学業を終えたドイツ人を教授として採用したという。従って、この時採用された人たちが事実上ドイツの最初の大学教授という訳であるが、彼らの身分、職務内容については以下に述べるような事情から、それほど明確にまた画一的に捉えることはできない。

Prag の大学も、またこの後に設立されたいくつかの大学も組織的にはパリ大学を模範としていた。従って、Studium は次のような二段階方式がとられていた。つまり、学生はまず Artistenfakultät (以下 AF と略す) で7つの Artes liberales を学ばねばならず、この AF を半分修了した者には Bakkalar の、また全部修了した者には Magister の学位がそれぞれ与えられていた。そして、この AF の上には、神学、法律学、医学から成る höhere Fakultäten (以下 HF と略す) があり、ここにも Bakkalar, Lizentiat, Doktor の学位があったという。しかしながら、HF で学ぶことができるのは AF の Magister を取得した者に限られていた。ドイツの最初の大学教授を考える場合、実際、この AF

の Magister 取得者の存在を無視することはできない。なぜならば AF の Magister 取得者は HF で学生として学ぶ一方で、AF で年下の後輩たちに教師として Artes liberales を教えることができるという〈二重の身分〉をもっていたからである。

さらに、この AF の Magister 修了に関しては、次のような当時の事情も紹介しておかねばならない。つまり、身分の高い貴族の子息たちは——家庭教師について勉強することによって——AF の勉強を免除され、いわば〈飛び級〉のように最初から HF で学ぶことができた（なお、彼らのほとんどは HF において彼らの身分に相応しい学問とされる法律学を学んだ。また、さらに上に行く場合には、イタリアの *Juristenuniversität* へ行ったという）。しかしながら、AF の Magisterexamen 自体は大して困難なものでもなかったのに、なぜ彼らはこれを敬遠したのであろうか？ この理由としては次の3つが挙げられている：① 自分より身分の低い者から何かを試問されるということが彼らには耐えられなかった。② (Examen の原義は〈学力を調べる〉ではなく、〈進級者の補充選択〉を意味したので) Magisterexamen によって後に HF の仲間となる者たちの興味に晒されるのを好まなかった。（しかしながら大学教授の身分を考える上では、①②よりも次の③の理由の方がより興味深く思われる）③ 当時、学ぶこと（しかも法律を）は貴族に不相応な事ではなかったが、教えること（しかも Artes liberales を）は貴族に不相応な事と考えられていた。実際、前近代的社会では、貴族などの身分の高い者が一般に大学で教えることは、1800年過ぎまでは不可能であった（どうしても教えようとするれば、自ら身分を下げねばならなかったという）。あの大法律学者 Savigny の場合にも 19c 初めにこの問題が生じた。そして、彼はこの問題を勇敢にも乗り越えた最初の一人になったという。

では、AF の Magister 取得者は当時どのような生活をしていただろうか？ 彼らの中でもごくわずかの幸運な者は、自己資金でささやかながらも学生寮などを経営し、ともかく HF の勉強に励むことができた。しかし、AF で教えながら、同時に HF で学ばねばならないという二重の負担を背負った AF の Magister 修了者の生活は実に厳しいものであった。彼らは大抵、Kleriker として結婚もせず、Kolleg とか Burse と呼ばれる寮に身を寄せて苦学を強いられた。ちなみに、この Kleriker (〈ギ〉 Klêros, (ラ) clerus) は Chaucer の «Clerk of Oxenford» の中に〈論理学に造詣が深く、ベッドの枕元には常にアリストテレスの本 20 巻が積み上げられ、瘦せた体に擦り切れた服をまとい、世俗に背を向け、信仰心が篤く、常に知的で道徳的な語を選んで話し、学ぶことも教えることも全く厭わぬ人間〉として描かれている。この Kleriker が古

来からヨーロッパの精神世界に対して重要な役割を果たして来たことは、なお現代においても〈知識人〉を表すのに敢えて〈Intellektuelle〉を使わずに、〈Kleriker, cleric〉が使われる場合が時たまあることから理解できよう。

さて、当時の HF において、貴族の子息のほとんどは、彼らに相応しい学問とされた法律を学んだことは先に述べた。実際、その当時、法律学者は社会的に高い評価を得ていた。医学者の場合は、収入はこれよりはるかに多かったが、社会的名声はそれほど高くなかった。神学者の場合は、社会的名望は法律学者のそれには及ばず、大体、哲学者の場合と同じくらいであったが、その学問的評価は非常に高く、中世の学界の頂点に君臨していたという。

この HF の教授たちの生活ぶりは、先に述べた AF の教授たちのそれとは異なっていた。例えば、神学の教授の中には後の Luther のように、学問に理解のある修道会に迎えられ、これによって扶養された者もいるが、それ以外の教授たちは大抵、在俗司祭となって、司教座教会または裕富な教区教会において〈聖職禄〉をもらい受けていた。固定収入と農産物などの現物支給から成るこの〈聖職禄〉は、教会の職務使命と結びついたものではなく、教会の地位と結びついたものであったので、教会のために大して何も行なわなくても受け取ることができるという有難いものであった。中世の文化のみならず、ドイツの大学もまたこの〈聖職禄〉の存在なしには考えられなかったと言われる所以である。それ故に、大学にとっては〈教育の自由〉よりも〈聖職禄の自由〉の方がはるかに重要であったようである。

以上にみたように、ドイツの大学教授と一口に言っても、(あの Kleriker に代表される) AF の教授と、〈聖職禄〉を受けていた HF の神学の教授とでは、経済的にも、社会的名望においても大きな相違があった。そして、すでに 14c には、大学は需要をはるかに上回る多数の学位取得者を生み出していた。こうした背景から、大学に常勤する者とそうでない者とを区別するために〈Ordinarius〉(この語の品詞は〈doctor ordinarie legens〉から来た形容詞であることに注意されたい)の称号が使われるようになった。

このように身分、生活条件などの点において同僚相互の間に大きな隔たりが見られた大学教授という職業にも、均一化の傾向がもたらされる契機となったのはあのフス派の闘争であった。この闘争によって、当時の大学はいわゆる〈典型的なドイツの大学〉(小じんまりとして、財力に乏しく、それぞれの Fürstentum によって管理された大学)へと変貌することになった。当時、ドイツに大学は 17 あったが、これに該当する大学としては Heidelberg 大学が挙げられる。中級位の Landesherr に管理されたこの大学は、4つの学部に約 20 人の教授がいたので、教授たちの俸給は安かったという。しかし、当時は景気も余り

良くはなく、大学教授の職を待っている者も比較的多くいたことから、この安い給料に対して誰も文句を言わなかった。ちなみに、この頃の大学教授一般の社会的名望は次第に低下しつつあったという。教授の募集も比較的近くの都市に限られるようになり、学生も周辺地域からの出身者が多くなった。こうしたことから、大学は教授と学生の双方にとって一種の長閑な Nest になった。この、いわゆる Nest 的大学としては、Heidelberg の他に Tübingen など(大体、今日、大学町と言われている中小都市の大学)が挙げられる。

しかしながら、当時にも、こうした Nest 的大学とは異なる大学がいくつか存在したことは言うまでもない。例えば、1000人以上の学生が学んでいた Wien 大学 (kaiserliche Universität) とか、大都市にあった Köln 大学、そして平穏な時代がまさに終ろうとする時期 (1506年) に設立された Wittenberg 大学などは、Nest 的大学からは程遠かった。とくに Wittenberg 大学の場合、Adelsuniversität の Ingolstadt 大学 (München 大学の前身) などと比べると、経済的に大変苦しかったために、自らの手で改革を行なうことになり、ひいてはこれが世の中までも変えることになったのは周知のところである。

さて、I. の段階の大学を「聖職禄大学」と呼ぶとすれば、II. の段階、つまり 16c-18c の大学はさしずめ「家族大学」と呼ぶことができよう。この時代も、大学の経済的基盤はあの中世的な聖職禄であったが、何よりもこの頃の大学に特徴的だったことは、大学教授の職を、家屋、家財道具、ギルドの会員権、君侯の継承権と同じように、大学教授の家族(先に述べた Kleriker とは異なり、今や大学教授も結婚できるようになっていた)の中で継承することができたことである。後に 19c になって大いに批判されたこの教授職の家族内での継承制度も、当時はあの聖職禄の取り扱いと同じく、大して問題にもならなかった。これも一種の社会的慣習のように考えられていたからであろう。この時期の大学教授のほとんどのタイプは「伝統を重視し、広範な百科辞典的教養を身につけ、大学規則に従順で、勤勉実直であった」と言われている。後期人文主義的な講義を行ない、従って社会的名声もそれなりに高かったこの時期の大学教授は、この「家族大学」に大そう適していたものと思われる。

有能な若者には、大学教授の娘と結婚することによって、将来この「家族大学」の中心的教授として活躍できる道も開かれることになった。なぜなら、大学教授の息子が、大学教授に必要とされる最低限の能力を常にもっているとは限らなかったからである(もっともこの場合でも、大学教授の息子は大学の評判を保つために必要な存在であったと言われているが)。それにしても、給料のさほど高くない大学教授が大勢の子供を育てている場合には、さぞ彼の臍も細くなったことだろうと思われる。しかしながら、この大学教授も運がよけれ

ば、彼の在職した大学の歴史にしかと自分の名前を残すことができたのである（もっとも、この場合、彼は大学にとっての精神的父親としてではなく、生物学的父親として……）。ちなみに、こうした〈家族大学〉としては、Tübingen 大学と Basel 大学があったという。

しかしながら、この〈家族大学〉の教授たちも決して気楽な日々を送っていた訳でもなかった。というのは、大学に残る中世以来の良からざる伝統として、教授間での給料の差が常識を越えるほどに大きかったからである。従って、教授たちは昇給の道を熱心に探り出し、その結果、できる限りいろいろな科目を担当するようになった。確か、あの Faust も、哲学、法律、医学、神学を教えていたのではなかっただろうか？

この時代の大学は（甚しい給料の差、そして依然として根強い法律学者の優遇など好ましからざる点もいくつかあったものの）管理支配者からの口出しがない限りは、まずまずは平穏でアカデミックな日常生活を過ごすことができた。社会史的観点からは、こうした大学はやがて Provinzialität の極限に行きつくまでに自己収縮をすることになり、そのために大学教授の社会的名声も資質も次第に低下するのではないかとずいぶん心配されたというが、この場合にも、大学は根本的にはキリスト教ヨーロッパ、つまり教皇や皇帝と依然として深く関っていたので、他の大学との交流が跡絶えるということとはなかった。

しかしながら、歴史は常に自らの出番を待っている。古いものと思われていた中にも、秘かに新しいものが芽生え始めていた。ドイツの大学において、この新しいものの息吹は 1694 年の Halle 大学の設立の時には、まだそよ風のようにやや控え目であったが、1734/37 年の Göttingen 大学の設立と同時に、これは嵐の如くに学問の世界に吹き荒れることになった。すなわち、この新しい風とは、すでにもう 17c の中頃にあの Leibniz の例があったように、当時、大学の外部に偉大な科学者が出現するようになり、これによって〈大学教授も専門的な科学者として社会の評価を受けなければならなくなった〉ことである。こうした事情から、以前の生物学的父親も真の学術的父親へと次第に変化をし始め、彼の子供たちも真の学術的子供になることを目差して努力するようになったと言われる。しかしながら、当時の知識人のかなりの数が、大学の外部に、つまりサロンやコーヒー・ハウスに集っていたこともまた事実であった。

(三重大学教授)